

# 15 広島県府中市 持続可能な「産業(ものづくり)×文化×観光」ビジネス創出

What ▶ #観光 #食・文化



左から府中市 商工観光課の吉田 希美さん、一般社団法人 協和元気センターの伊藤 博治さん、小川 良雄さん、同代表理事の前原 幸男さん、一般社団法人 府中市観光協会の朝野 尚作さん、府中市 商工観光課の千葉 祐輔さん。

## お話を伺った方々

### 地域再生マネージャー

一般社団法人 九州のムラ 代表理事  
養父 信夫さん

### 行政

府中市 商工観光課  
吉田 希美さん

### 民間

一般社団法人 協和元気センター  
代表理事  
前原 幸男さん  
一般社団法人 府中市観光協会  
朝野 尚作さん

## 観光振興に向けた文化の掘り起こしが、新たな地域の活力に

府中市は広島県東南部に位置する人口約3万5,000人の「ものづくり」のまち。事業では少子高齢化・人口減少対策、地域経済活性化を目的に、市が策定した「府中市観光振興ビジョン」に基づいた観光振興に取り組み、市内の5エリアで「ものづくり」「歴史・文化」「住民交流」の3要素を組み合わせた旅行商品の開発に挑戦。観光消費額拡大を目指した。

### 課題

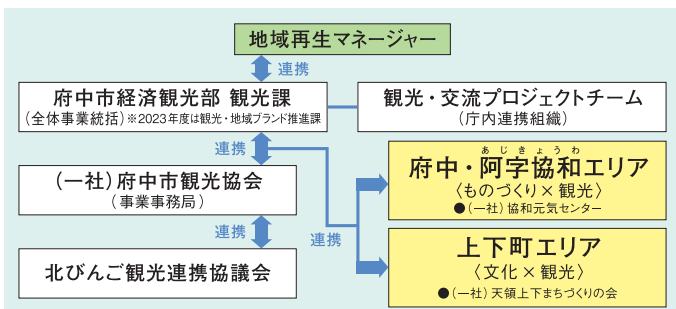
若者を中心とした転出超過が続く府中市は、2015年から2045年の30年間で人口が4割近く減少すると予測され、県内でも人口減少が著しい地域のひとつに挙げられる。また、古くから府中家具や金属・機械加工などの製造業が盛んだが、市内総生産に占める割合は低下傾向にある。それに代わる産業として、ものづくりや地域資源を生かした観光産業に着目したものの、宿泊や飲食、購買施設が十分でないことや、認知度の低さが課題となっており、観光地としての魅力向上が急務とされていた。

### 目的

府中市では、2020年度に「府中市観光振興ビジョン」を策定し、「地域で稼ぐ観光の実現」「選ばれる観光地づくり」「観光を推進する地域づくり」を基本方針として定めた。具体的には「府中・上下町エリアの歴史・文化」「府中市が誇るものづくり」「地域住民と観光客の交流」の3要素を組み合わせた旅行商品を開発し、「学ぶ・体験する」といった目的型ツーリズムを促進し、さらには商店街活性化、空き家活用といった2次効果を生み出すことが目標とされた。

## 地域再生マネージャー事業 実施期間(2021年度～2023年度)

### 事業実施体制



府中市経済観光部が事業全体を統括し、事業事務局の一般社団法人府中市観光協会と連携。また、北びんご観光連携協議会とも連携し、広域に向けて情報発信した。地域再生マネージャーの養父 信夫さんが事業を統括・指導し、また、地域住民らも交流型体験プログラムの企画などに協力した。

### ●機運を高めるための合意形成

#### What — 何をしたのか？

「産業」や「文化」を観光資源としたツーリズムを推進していくことへの地域住民の理解を得るため、機運の醸成に努めた。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●観光ビジョン策定のため、地域住民への意識醸成を図った

事業開始当初は、地域ごとに観光振興への取り組み状況に差があったため、まずは地域住民らに「府中市観光振興ビジョン」について情報共有するためのワークショップなどを実施。その結果、府中・阿字協和エリアはものづくり、白壁が残る上下町エリアは文化、矢野・井永<sup>いなが</sup>エリアは農村風景を軸とした観光を推進することになった。地域住民が観光事業への理解を深め、自らが関わることで、持続可能な地域づくりに向けた基盤を固めることを目的とした。

「まず着目したのは地域住民が何に『誇り』を見出しているかでした。ワークショップを重ね、地域の歴史をひも解き、何が重要な資源なのかを見極め、時間をかけて地域住民の主体的な関わりを引き出せるように努めました。そうしたプロセスを経て、エリアごとのコンセプトが固まっていきました」（養父さん）

##### ●各エリアで事業実現の可能性を検討

各エリアが地域資源を前面に押し出したコンセプトを固め、イベントなどを実施するエリアも見られたが、そこからの展開は簡単ではなかった。

「関心はもっていただいているものの、いざ具体的に考えると事業を引っ張るリーダーが誰なのかなかなか見えてこないとか、思うように農家との連携が取れないといった理由で、実現が難しいと感じる地域も出てきました。その結果、府中・阿字協和エリアと上下町エリアが継続して事業を推進していくことになりました。私たちは地域の代表と対話していますが、そのさらに先にある、各地域内での合意形成の難しさを感じましたね」（朝野さん）

### ●地域の特色を生かした観光プログラムを開発

#### What — 何をしたのか？

2021年度・2022年度に対象となった各エリアで事業推進の可能性を探っていった結果、2023年度は府中・阿字協和エリアと上下町エリアで事業を継続していくこととなり、具体的なプログラムづくりを進めた。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●2地域が具体的な観光プログラム開発を進める

###### （府中・阿字協和エリア）

ものづくりのまちとして、伝統文化の「体験」を軸にしたプログラムを検討した。

【府中エリア】多くの文化人に愛された創業1972年の国登録有形文化財の料亭旅館「恋しき<sup>こいしき</sup>」を活用し、インバウンド客向けの日本文化体験プログラムを企画した。

【阿字協和エリア】江戸初期から昭和にかけて栄えた上質な和紙「阿字和紙」を、地域住民らによる有志の団体「一般社団法人協和元気センター」が復活させた。また、地元の古刹「松林寺」と連携し、写仏・和紙灯り・団扇作りなどの阿字和紙を用いた体験プログラムを企画。中心となってこれらの取り組みを牽引したのは、代表理事の前原 幸男さんだった。

「古い道具が住民の家に残っていたので、当初はそれを用いて和紙作りを始めました。冬の作業なのでものすごく寒いし、すべて手作業で進める。現代にはない本当に大変な作業です」（前原さん）

「前原さんがリーダーシップを発揮してプログラムづくりを前に進めてくださいました。相談する前に物事がどんどん前に進んでいるという感じで、前原さんのようなキーパーソンをいかに見出すかがこうした事業を進めていく上で大変重要だと感じましたね」（朝野さん）

###### （上下町エリア）

観光スポットとして「レトロな町並み」が認知されていることから、インバウンド客をターゲットとした取り組みを強化していくこととなった。



（上）楮<sup>こうぞ</sup>の皮を剥き、原料となる繊維を取り出す。原料の楮100kgから得られる紙の原料はわずか5kgほど。

（下）阿字和紙作りの工程は大半が手作業で、12月から3月にかけて行われる。写真は紙漉きの様子。

## ● 伝統を特産品として磨き上げ、地域のブランドに（府中・阿字協和エリア）

### What — 何をしたのか？

「府中市観光振興ビジョン」の策定をきっかけに阿字和紙の製造、品質向上に対する機運が高まり、地域資源を生かした観光商品を新たな企画と掛け合わせて特産品として磨き上げるという「稼ぐ観光」のもうひとつの潮流へと繋がっていった。

### How — どのようにしたのか？

#### ● 伝統技法を用いた桐箱を開発

【府中エリア】府中市で生産される家具の引き出しを組み立てる際に用いる「蟻組<sup>ありぐみ</sup>」を活用し、写真から転写できるレーザー加工で絵を描いた桐箱を作製。市内のクラフトスポットを巡るサイクル観光コースで販売する土産物として検討された。

## ● 「稼ぐ観光」実現のための販売促進とPRの強化（上下町エリア）

### What — 何をしたのか？

開発した商品で着実に収益を上げていくためにプロモーションを強化した。旅行会社との連携強化、イベント開催といった活動を通して「観光消費額の拡大」と「地域経済の底上げ」を目指した。具体的には、旅行会社が年間約20本のインバウンドツアーを実施。また、地域の魅力的な景観を維持し、来訪者との交流や新たなビジネスを生み出すためには空き家・空き店舗の活用が不可欠であると考え、2021年度と2022年度には空き家を交流拠点として活用し、チャレンジショップを企画した。

### How — どのようにしたのか？

#### ● 空き家を活用したチャレンジショップによる出店シミュレーション

観光地としての魅力を高めるためには飲食店と宿泊施設の充実が不可欠と考え、まずは飲食店を増やすため「空き店舗活性化事業（チャレンジショップ事業）」を開始。エリア内の歴史ある通りに建つかつてのお好み焼き屋など、3軒の空き店舗を出店希望者に短期間貸し出し、本格的な開業前の実践的な挑戦を支援した。

「この事業から本格的な開業は生まれませんでした。空き店舗を利用する上でのルールや仕組みを探る良い契機にもなりました。府中市はインバウンドによる観光客の伸び率で全国上位に入るほど数字は増えていますが、現状は立ち寄る場所になってしまっており、じっくりと滞在してもらえないのが実情。飲食店を増やし、宿泊先として空き家を活用できないか模索しています」（朝野さん）

## 主な成果

### ● エリアごとに地域住民を巻き込んだ取り組みが前進

ワークショップや地域住民を対象にした和紙作り、モニターツアーなどの調査を実施したことで、関係者や地域住民の事業への理解と共感が深まり、各エリアで協力体制が構築された。

#### （府中・阿字協和エリア）

【府中エリア】「恋しき」の活用に先駆けて、地元で琴、尺八、三味線、茶道、香道など伝統芸能の師範を招いた体験プログラムを試験的に実施。インバウンド客を想定したモニターとして地元の学校に勤務する外国語指導助手らを招き、感想をヒアリングした。これにより、プログラムの本格的な実施に向けてイメージを具体化することができた。

#### （上下町エリア）

白壁が並ぶエリアでは、地域住民が主体となり、イベントを年に数回企画・運営して市内外から人を呼び込むなど、地域が一丸となって観光機運の醸成や観光地づくりに積極的に取り組んだ。

### ● 地域資源を活用した商品開発

#### （府中・阿字協和エリア）

【府中エリア】家具製造の技術を応用した桐箱は、昆虫標本を収めた「匠の昆虫標本桐箱」として、ふるさと納税の返礼品に採用され注文を安定して獲得。地域の技術が新たな市場を切り開いた。

【阿字協和エリア】阿字和紙の復活がメディアで取り上げられ、市を代表する特産品のひとつとなった。内外から注目を集めたことで、2023年5月に開催されたG7広島サミットでは、各国首脳への贈り物を包む包装紙に採用された。

「広島県では平和記念公園に平和の祈りとして折り鶴がたくさん送られてきます。これらを再生紙にしてG7用に番傘を製作しないかとの依頼が、広島県の観光連盟の担当者から府中市観光協会にありました。そこで、こちらから阿字和紙を使用することを提案し、実現したのです」（朝野さん）

#### （上下町エリア）

地域住民が手作りした雑貨や、空き家になった古民家から出てきた骨董品などを入れたカプセルトイ「天領上下ガチャ（散策みくじ付）」を製作し、イベントなどでも活用した。

## 地域再生マネージャーコメント



### PROFILE

1962年生まれ。1995年に独立し、グリーンツーリズムの普及を目的とした雑誌「九州のムラ」を創刊。以来、民間企業との協働プロジェクトを多数手がける。

一般社団法人 九州のムラ 代表理事 養父 信夫さん

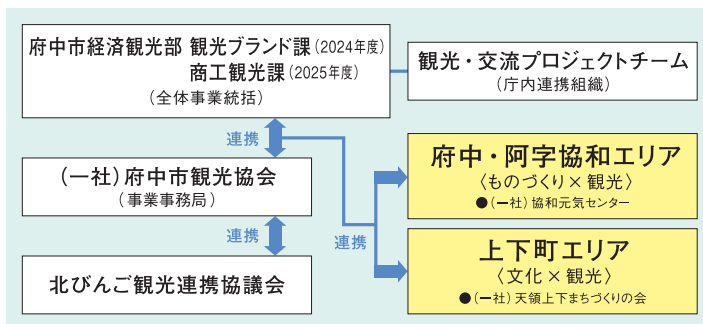
## 地域住民の熱意こそが継続の鍵に 府中市のポテンシャルに期待した3年間

府中市に関わる中で重視したのは、取り組みを一過性のイベントで終わらせないこと。事業終了後も地域住民が継続して取り組めるような「人づくり、仕掛けづくり、仕組みづくり」を目指しました。

事業の成功は「タイミングと人」に左右されるものです。特に地域のキーパーソンが、地域を愛し、本気で行動するかが重要です。その点、府中市は地域住民の熱心な思いが感じられる土地でした。中でも、かつての地域の生業であった阿字和紙作りの復活と商品化に取り組んだ阿字協和エリアは、熱意が非常に高かった。時代を担う若者層にも期待がもてる状況だったことで、和紙作りをビジネスとして継続させる挑戦も可能になりました。地域が自走するための鍵は、地域再生の取り組みを「兼業」から「専業」へと転換し、生業として持続させられるかどうかにあります。その可能性を十分に感じられた3年間でした。

## 地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2024年度以降)

### 事業実施体制



府中市経済観光部が引き続き事業を統括し、観光庁の補助金も活用。一般社団法人府中市観光協会が観光プログラムの強化やPR、インバウンド誘客のための営業活動を担っている。

### 事業実施内容

#### ●阿字和紙を用いた多様なビジネス展開 (府中・阿字協和エリア)

#### What — 何をしたのか?

【阿字協和エリア】一般社団法人協和元気センターを中心に阿字和紙の魅力を伝える活動を続け、さらに地域での原材料生産に取り組み、経済循環を生み出すことを目指した。

#### How — どのようにしたのか?

##### ●県内各地で阿字和紙を使った取り組みを展開

2025年3月開業の広島駅ビル「ミナモア」内にあるコミュニティスペース「miobyDoTS」にて、瀬戸内をイメージした壁画の素材に阿字和紙が利用されたほか、福山市で製造されているデニム素材とコラボした御朱印帳の材料として提供した。こうした取り組みを通して、阿字和紙の知名度が徐々に向上していった。

##### ●休耕田で和紙原材料を栽培し、地域内循環を生み出す

地域住民が主体となり、和紙の原材料となる楮<sup>こうぞ</sup>、みつまたの苗木を休耕田や畦に植え、原材料も自分たちで栽培するようになった。休耕地を活用すると同時に、阿字和紙を通じた地域住民らの誇りの醸成に繋がっている。

## ●アーティストとのコラボレーションが、阿字和紙の新たな付加価値に

書道家が阿字和紙を用いて書道パフォーマンスを披露したり、現代アーティストが阿字和紙を型染めして作品を制作するなど、アート方面とのコラボレーションが実現し、新たな付加価値を生み出している。

「東京で活躍するアーティストの Donchi さんとコラボレーションした際には、観光庁の補助金を申請して、作品制作や和紙作りの様子を収めた動画を作成し、PR に活用しました」（吉田さん）

## ●開発した観光資源でインバウンド需要を取り込む

### What ー何をしたのか？

#### （府中・阿字協和エリア）

【府中エリア】事業実施期間中に開発した観光・商業複合施設「恋しき」での日本文化体験プログラムをはじめ、インバウンド客を視野に入れた施策を多数展開した。

#### （上下町エリア）

観光客に向けた PR 強化施策として、「上下天領ツーリズム」のパンフレットのページ数を増やして情報の充実を図った。

### How ーどのようにしたのか？

#### ●インバウンド需要をターゲットに、「恋しき」での日本文化体験プログラムを商品化（府中・阿字協和エリア）

【府中エリア】旧料亭旅館「恋しき」の活用を本格的に開始。着物の着付け、懐石料理、香道、香り袋作り、香り遊び、礼法などの体験、庭園散策などを組み合わせた多様な日本文化体験プログラムを商品化し、インバウンド客をターゲットに販売した。また、事業実施期間中に実施したモニター調査の結果などをもとに、より高付加価値でリアルな体験を組み合わせたツアーを作成した。

#### ●サイクリングルートの継続（上下町エリア）

事業実施期間中に設定した「びんご府中サイクルート」に含まれる、歴史的町並みを巡る「上下散策ルート」や「天領上下・路地裏ルート」などのサイクリングルートを事業実施後も継続して発信。観光協会が貸し出している電動自転車も定期的に利用されており、町並み散策の手段として定着している。

## 主な成果

### ●「稼ぐ観光」の追求が、持続的な地域の価値創造に繋がった

事業実施期間中に生まれた取り組みの数々が、地域に根付き、確かな成果を生み出した。

#### （府中・阿字協和エリア）

【府中エリア】「恋しき」では英語での接客が可能なスタッフを配置したほか、英語や中国語のプロモーション動画も作成し、観光協会のウェブサイトで公開。インバウンド需要を喚起した。

【阿字協和エリア】阿字和紙は体験プログラムを起点に、地域ブランドの象徴へと進化。商品化や教育現場での活用が進み、文化として存在感を高めた。

#### （上下町エリア）

骨董品や工芸品を詰めた「天領上下ガチャ」が継続的に運用される仕組みを整えたことで、地域資源の循環を生み出している。また、インバウンド客からの人気も高い。

「打ち上げ花火のような派手なイベントは必要ありません。小さな成功を積み重ねることが、地域が自ら動き出す原動力になる。府中市の取り組みは、その好例といえるでしょう」（養父さん）

## 自治体コメント



府中市 商工観光課 吉田 希美さん

### 6 ファンが増えたり新たな人の流れが創出された

事業実施期間中に創出したさまざまな事業が、事業終了後も継続しています。これは地域住民の地元愛と主体性、地域のまとめ役の存在があってこそその結果です。市にできるのは一方的に事業の方向性を示すことではなく、地域住民の意見を真摯に聞いて対話を重ね、できることとできないことを明確に伝えること。そして補助金制度などの情報を積極的に発信し事業をサポートすることだと学びました。事業を通じて地域の人と繋がり、まちの魅力を改めて知れたことが個人的には収穫でした。

# 取り組みのプロセス

事業の方向性

行政での取り組み

地域での取り組み

成果

成果に繋がったポイント

マネージャー事業実施期間中

## 1年目(2021年度)

それぞれの特性を生かすためにエリアを細かく区切り、各エリアの課題に沿って事業を開始。体制、機運などを総合的に考慮し、白壁(上下町)・矢野・井永・府中・阿字協和の5エリアに絞った。

- 市が目指す「観光ビジョン」について地域住民と情報共有し、対話の中で方向性を調整した。
- 地域コミュニティに属する人々が集まる機会を増やし、地域の交流・団結促進を図った。

- 地域再生マネージャーがヒアリングなどによって地域資源や人材を洗い出し、今後の事業展開を指導した。
- 伝統文化の「体験」を軸にしたプログラムを検討した。

- 曖昧になっていた地域課題の洗い出しを行ったことで、各エリアの特色や目指すべき方向性が明確になった。
- 伝統文化の「体験」を軸にした旅行商品を磨き上げたほか、クラフト商品も試作した。

- 観光振興に取り組むエリアを5つに絞ることで、それぞれの進捗状況を可視化することができた。
- 各エリアの課題について時間をかけて考えたことが、強みの再発見・再確認に繋がった。

## 2年目(2022年度)

エリアごとに方向性を定め、府中・阿字協和エリアでは「ものづくり×観光」、白壁のまち並みが残る上下町エリアでは「文化×観光」、農村部の矢野と井永エリアでは「農村風景×観光」を推進し、課題解決に取り組んだ。

- 観光課が中心となり、関係する他課にも協力を依頼しながら複数の課が関わる体制を構築した。
- 広報活動、プレスリリースを通じた情報発信、マスコミへの周知と取材対応を積極的に行った。

- 一般社団法人協和元気センターが中心となって、阿字和紙を商品化するための取り組みを進めた。(阿字協和エリア)
- 空き店舗をチャレンジショップとして活用するための整備が進められた。(上下町エリア)

- 前年度にエリアごとの課題と強みを明確にしていたことが、観光商品の開発などに生かされた。
- エリアごとの体験プログラムやイベントが実施され、阿字和紙活用の取り組みも本格化した。

- エリアごとに目指す方向性を分けたことで、各エリアの関係者が最終目標をイメージしやすくなった。
- 目標から逆算して優先的にやるべきことを考え、効率的に工程を進めることが可能になった。

## 3年目(2023年度)

最終的には府中・阿字協和エリアと上下町エリアが取り組むことになった。2年目で行ったビジネス創出に繋がるさまざまな商品をさらに磨き上げるため、これまで開発してきた商品の営業計画を検討し、販売促進にも力を入れた。

- 観光課が中心となり、関係する他課にも協力を依頼しながら複数の課が関わる体制を構築した。
- 広報活動、プレスリリースを通じた情報発信、マスコミへの周知と取材対応を積極的に行った。

- 旧料亭旅館「恋しき」でのインバウンド客を対象とした日本文化体験プログラムを検討した。(府中エリア)
- 阿字和紙を用いた体験のモニター検証を実施した。(阿字協和エリア)
- 「天領上下ガチャ」を商品化した。(上下町エリア)

- 最終的に精査した事業について、地域住民を巻き込んだ首都圏PRやモニターツアーを実施した。
- 阿字和紙の関係者と松林寺の関係者らが協議し、プログラム実施の協力体制を築くことができた。(阿字協和エリア)

- エリアを絞り込んだことで地域の魅力を深掘りでき、より良い商品やプログラムの開発に繋がった。
- 引き続き地域住民らの「誇り」を中心に据え、一つひとつ理解を得ながら進めるよう努めた。

## 4年目(2024年度)以降

育成してきた事業の最終的な磨き上げを行い、「発信できるコンテンツの醸成」「今後も磨き上げを行っていく事業」という視点で見直しを行った。市主導、地域主導の2パターンの取り組みを実施している。

- 国や県のさまざまな補助金の活用を目指して申請する中で、事業内容がさらに精査された。
- 運営のスキームの見直しや地域住民との調整を行い、事業のブラッシュアップを図った。

- モニター実施を経てインバウンド客をターゲットにした体験プログラムを商品化した。(府中エリア)
- 一般社団法人協和元気センターが中心となり、阿字和紙の普及活動や商品化に引き続き取り組んでいる。(阿字協和エリア)

- 「恋しき」での日本文化体験プログラムがインバウンド客に好評で、新たな収益源となっている。(府中エリア)
- 現代アーティストとのコラボレーションなど、阿字和紙活用の新しい展開が生まれている。(阿字協和エリア)

- 市主導の事業と地域主導の事業を分けたことで、双方の得意分野を生かしやすい体制が構築された。
- 事業実施期間中に基礎固めや試験運用した取り組みを地道に続け、時間をかけて商品化させた。

マネージャー事業終了後

## 2024年度までの実績

府中・阿字協和エリアでは、阿字和紙の原材料収穫から手漉きまで一連の流れを体験できるプログラムのほか、インバウンド客向けの体験プログラムなど合計8つの観光プログラムを開発。鑑賞用扇子などの土産物や、PR用のブックレット・動画も制作した。上下町エリアでは、「上下天領ツーリズム」パンフレットのボリュームを増やし、情報発信を強化した。府中市全体では2022年度に約75万2,000人(うちインバウンド客0人)の観光客が訪れたが、2024年度には約102万6,000人(うちインバウンド客496人)と上昇傾向にある。